

未来はどうなるか誰も知らない

僕は 中二の夏に 北区紫野から
伏見区向島へ 引っ越した。
京阪電車で 通学しだしてまだ間がない。

一方、安田と北里先輩は地元である。
さすが、安田も中一から電車乗ってたせい、
また、小学校の友達がたくさんいるせい、
だいふ知っていた。

しかし、僕には 名前が出ても
誰のことか さっぱりわからない。

僕が知っているのは、あの人だけだ。

晩秋、肌さむい朝の通学時のこと。

たまたま 一緒になった後輩の西野が
僕が あの人の方ばかり見ているので
僕に 声をかけた。

「先輩、あの人、僕の小学校の先輩や、
きれいな人ですよ。」
「うん、ほんまに、きれいや。」

僕はその人の顔に見とれていた。
その人が こちらを見ない時はいつも
その人を見ていた。
その人が こちらを見ると目をそらした。
そのことを思い出していた。